

修士論文（要旨）

2013年1月

アカデミックな接触場面におけるインターアクションの分析と考察
—意味交渉に着目して—

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

211J3015

張 璐

目次

第一章 はじめに	1
1.1 研究背景・動機	1
1.2 アカデミック・ジャパニーズ能力とアカデミック・インターアクション能力	3
1.3 研究の目的	4
第二章 先行研究	5
2.1 アカデミック・ジャパニーズ能力に関する研究	5
2.2 接触場面のインターアクションにおける意味交渉に関する研究	6
2.3 アカデミック場面における調整行動に関する研究	8
第三章 調査概要と分析枠組み	9
3.1 調査概要	9
3.1.1 調査協力者	9
3.1.2 調査方法	10
3.2 分析枠組み	10
第四章 結果と分析	12
4.1 意味交渉の特徴	12
4.1.1 言語上の意味にかかわる会話上の交渉	12
4.1.2 専門的知識にかかわる会話上の交渉	20
4.1.3 インターアクションにかかわる会話上の交渉	37
4.1.4 その他の会話上の交渉	43
4.2 アカデミックな接触場面における留意点	48
4.2.1 日本語母語話者の立場	48
4.2.2 日本語非母語話者の立場	49
第五章 総合的考察	52
5.1 参加者間の意味交渉の特徴	52
5.2 アカデミックな接触場面の問題点	53
5.3 アカデミック・コミュニティへの参加	54
第六章 おわりに	56
6.1 本研究のまとめ	56
6.2 日本語教育への提言	56
6.3 本研究の限界と今後の課題	57

謝辞

参考文献

巻末資料

キーワード アカデミック・ジャパニーズ アカデミック・インターアクション
接触場面 意味交渉 相互行為管理プロセス

要旨

日本政府が打ち出した「留学生 30 万人計画」により、留学生に対する審査基準が緩和されことは、日本への留学希望者にとって朗報となった。日本学生支援機構の平成 23 年（2011 年）の調査¹から、留学生の進学先は私立大学が最多で、私立大学が重要な役割を果たしていることが分かる。また、専門に関しては、文化系に在籍する留学生の比率は 66.3%と 3 分の 2 を占めている。したがって、私立大学の文化系に在籍する留学生の現状を把握すること、特に大学・大学院におけるアカデミック場面についての研究は緊急課題であると考えられる。

本研究の目的は、首都圏にある私立大学の人文系大学院の専門性・タスク性の高い大学院生同士のグループディスカッションおよびアカデミックな接触場面を取り上げ、ディスカッションに現れる意味交渉に着目し、参加者間の言語調整行動を明らかにすることである。具体的には次の 2 点を研究課題とする。1) 参加者間の意味交渉の特徴は何か。2) アカデミックな接触場面の留意点は何か。

アカデミック・ジャパニーズ能力は日本留学試験の日本語シラバス²によって「大学などでの勉強・生活において必要となる日本語能力」と定義されている。一方、ネウストプニー（2003）は「単に日本語の規範の観点が取られるのではなく、相互行動のアプローチの中での交渉、つまり管理プロセスにも着目すべきだ」とアカデミック・インターアクションというより広いより現実的な定義を提唱している。本研究はネウストプニー（2003）のアカデミック・インターアクションの概念に従い、データの分析・考察を行う。

調査協力者は 2012 年 4 月に入学した大学院生で、合計 5 名で、2 つのグループに分けた。3 名（日本語母語話者 2 名と中国語母語話者 1 名）のグループと、2 名（日本語母語話者 1 名と中国語母語話者 1 名）のグループである。5 名の調査協力者は大学院の同じ科目を履修している。彼らに与えられた課題はそれぞれの研究テーマにそって、グループディスカッションを行い、最後に研究成果を授業で発表することである。研究成果の発表までの間、2 つのグループディスカッション場面を録画・録音した。それぞれのグループディスカッションを 4 回ずつ、合計 8 回行った。すべてのグループディスカッションの終了後、アカデミックな接触場面における意味交渉行動や特徴を把握するため、5 名の調査協力者に個別にフォローアップ・インタビューを行った。フォローアップ・インタビューは録音のみである。フォローアップ・インタビューは日本語母語話者に対しては日本語、中国語母語話者には主に中国語で行った。すべてのグループディスカッションとインタビューデータは文字化した。

本研究の分析枠組みは宮副（2003、2005）の分析枠組みを参照する。宮副（2003、2005）は会話上の交渉過程を 4 タイプに分類している。すなわち、「言語上の意味にかかわる会話上の交渉」、「専門的知識にかかわる会話上の交渉」、「インターアクションの意味にかかわる会話上の交渉」、「会話上の役割交渉」である。さらに、「言語上の意味にかかわる会話上の交渉」の下位分類として、尾崎（1993）の分析枠組みを援用する。尾崎（1993）、日本語言語上の「聞き返し」を、「反復要求」、「説明要求」、「反復・説明要求」、「聞き取り確認要求」、「聞き取り確認・説明要求」、「理解確認要求」という 6 種類に分けている。フォ

ローアップ・インタビューは箕浦（1999）の「解釈的アプローチ」を用い、カテゴリー化を行い、データの分析を行った。

その結果と分析では、2つのグループは限定された時間内に成果を出さなければならない、つまりタスク性の高いディスカッションに参加したため、絶え間なく「意味交渉」を行ったことが明らかになった。一方、専門性の強い協働研究であり、「専門的知識にかかわる会話上の交渉」を中心に会話を交わしていることが分かる。「言語上の意味にかかわる会話上の交渉」は言語上の交渉に限らず、「役割交渉（母語話者と非母語話者）」のような言語外の交渉と共起することが明らかになり、3回の「交渉の連鎖」も観察できた。「専門的知識にかかわる会話上の交渉」においても、「インターアクションにかかわる会話上の交渉」においても、ほかの会話上の交渉と共起する機会が多いことも明らかになった。上述した4種類の会話上の交渉に加え、本研究は「人間関係にかかわる会話上の交渉」と「スケジュールにかかわる会話上の交渉」が行われたことを明らかにした。アカデミックな接触場面における留意点について、日本語母語話者には「協働研究へ参加する意識」「日本語母語話者としての役割」「日本語非母語話者の参加に対する配慮」「協働研究へ参加する苦労」という4つのカテゴリーと、日本語非母語話者には「協働研究へ参加する意識」「日本語に対する意識」「日本語非母語話者としての役割」「協働研究へ参加する壁」という4つのカテゴリーが分類された。

以上の結果から、日本語非母語話者は言語ゲストとしての参加意識、日本語や専門的知識における下位意識、日本語母語話者への期待・信頼意識などが立証された。このような不均衡な参加形式から、日本語母語話者と日本語非母語話者は相互に協働への強い意欲が感じられない結果となっていることが分かった。大学院生同士からのアカデミックな討論では、参加者が全員が対等な立場で協働的に関わるのが当然であるが、本研究では、対等な立場の関係性の構築が困難であった。その不対等な関係性で、日本語非母語話者は協働研究に関しての効力感が持てず、自己役割が自覚できないため、アカデミック・コミュニティへ主体的に参加することができないことにつながった。

本研究はアカデミックな接触場面におけるインターアクション上の意味交渉の特徴と留意点を明らかにした。大学、および大学院に入る目的を持っている留学生（日本語学習者）を対象としてアカデミック能力を育成するための予備教育において、どのようなアカデミック能力を優先的に指導すべきかなどについて、具体的な提言を行う。本研究の限界として接触場面のみを観察にとどまっており、多様な場面の意味交渉ストラテジーにまで言及できなかったことが挙げられる。今後の研究課題としたい。

参考サイト

- 1 日本学生支援機構平成 22 年度外国人留学生在籍状況調査結果
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html
検索日 2012 年 6 月 21 日
- 2 日本留学試験日本語シラバス—JASSO
http://www.jasso.go.jp/eju/syllabus_01.html 検索日 2012 年 6 月 21 日

参考文献

- 尾崎 明人 (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー—「聞き返し」の発話交換をめぐって—」、
『日本語教育』 81 19—30 ページ
- ネウストプニー (2003) 「アカデミック・インターアクションの理解に向けて」、平成 14
年度～16 年度科学研究費補助金基盤研究費 (A) (1) 課題番号 14208022 研究成
果中間報告書『日本留学試験』とアカデミック・ジャパニーズ』 139—150 ページ
- 箕浦 康子 (1999) 『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門』
ミネルヴァ書房
- 宮副ウォン 裕子 (2003) 「多言語職場の同僚たちは何を伝えあったか—仕事関連外話題
における会話上の交渉—」、『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト
—』 明治書院 165—184 ページ
- 宮副ウォン 裕子 (2005) 「多言語職場の会話上の役割交渉」、『2005 年度日本語教育学会
春季大会 予稿集』 日本語教育学会 195—200 ページ